

病児保育奮闘記

(3)

子どもサポート H&K

大石 仁美

斬新なデザインが脚光!?

超鈍行列車が走りだす

3月末で勤務を終え、無事退職した私は4月から新しい自分たちの職場に入りました。きりがいいので、月曜日の7日を開所日ときめ、それまでの間、二人で毎日定時に通って床を磨いたり、おもちゃを整理したり、食器やらタオルやら必要なものが漏れていないか点検などをしていました。すべてがまだ新しいので、特に掃除して磨くことなどしなくていいのですが、はじめてお客さんを迎える前に心の準備をしておかないと落ち着かないというのが本当のところでした。

この時点で、知人から紹介されたという人が数名、ネットで知ったという人が数名入会してくれていましたが、これから先どうなっていくのか、全く見当もつかず期待と不安でいっぱいでした。

実は年末に朝日新聞の記者から取材の申し込みが入っていました。全国病児保育協議会の名簿で知っただけなのですが、まだ準備段階で何も申し上げることはないとお断りしていました。その方は4月になるのを待ちかねるように1日に取材に見えました。さすがに一流新聞の記者さんで、質問も的確で、なにより病児保育の現状をよく知っておられ、信頼できる方という印象を受けました。記事は一か月後に掲載されました。



おもしろいことに、朝日新聞に掲載された日の朝、それを見た京都新聞の記者さんから取材の依頼があり、翌日すぐに現れました。二番煎じの記事も載せてみます。



朝日新聞の記者さんは「その後お仕事は順調ですか」と気遣いのお電話を下さり、行政に届けておいた方がいいでしょうとアドバイスしてくださいました。こうした励ましはとても心強く、嬉しいものでした。

この後も取材は続きます。6月にはリビング北、読売ファミリー、KBS 京都放送、このKBSは団先生の紹介で、さりげなく気づかいをしてくださる先生のお人柄が感じられ、ほのぼのと心温まるものでした。さらに月刊福祉などの雑誌にも掲載されました。このように多くのマスコミが取り上げてくれたのは、だれもが欲しいと思っているサービスなのに、何故かどこもやってなくて、儲からないのがわかっていながら、なぜ私財を投げ打ってまでするのだろうかという興味と関心だったろうと思います。

当時、京都市には病児保育はなく、行政の補助を受けた医療機関併設型の病後児保育施設が5箇所あるだけでした。常識的に考えても、忙しく働いている親が、病気の治った子をそんな施設に預けるとは思えません。治ったらすぐ通い慣れている園に預けるでしょう。本当に欲しいのは病後ではなく、病中なのです。医療機関がなぜそれをしないのか不思議でしたが、行政が絡むと、縛りがかかって動けないということでしょう。つまり行政サイドがリスクを避けているということです。形だけ整えてよしとする行政の実態が垣間見えます。だいたいリスクのない仕事なんてあるのでしょうか。あるとすれば、なんてつまらない仕事でしょう。

そうだ、行政に頼らず自由な発想で、親も子も喜ぶような仕事を思い切りやろう。そう決心すると、やりたいことがどんどん膨らんでくるのでした。

さて、このように派手な出足で動き出したのですが、実際はどうだったのでしょうか。問い合わせや入会申込者が殺到した!?なんて甘いものではありませんでした。4月の入会者4名、5月8名、6月7名、1年後の3月末で総数48名。この子たちの誰かが病気になって、毎日利用者があるなんてあるはずもなく、誰かお客さんこないかなあと待ちわびる日々。ほとんど開店休業状態で、暇を持て余していました。

毎日ゴロゴロしているわけにもいかず、この時間をどう使おうか考えた末、まずは体力づくりを兼ねて、二人で半径5キロ内の園を歩いて宣伝にまわろうということで、チラシを片手にウォーキングに出かけることにしたのです。この時初めて携帯電

話なるものを手にし、転送されるように設定して動くことになりました。携帯があると自由な時間が奪われると思っていた私の価値観はあっさり崩れ去りました。

このウォーキングはなかなか面白いものでした。こんなところにこんなお店が、まあ素敵なお家！ちょっとお庭を拝見、あれ、ここがかの有名な神社だったの、この道を辿ればいったいどこへ出るんだろう。等々面白い発見がいっぱいで、で、肝心の目指す保育園は、どこも分かりにくいところにあるのでした。このウォーキングは、後で保育園にお迎えに行くのにずいぶん役に立ちました。

利用者のほうはどうだったかといいますと、実は開所後まもなく初めてのお客さんがあったのです。待ち望んだお客さんで、私たちは大喜び。2歳のかわいい男の子で、最初は戸惑っていたようでしたが、馴れてくると、結構やんちゃで、部屋のあちこちを探索に回り、きゃっきゃと声を立てて走り回るので。私たちもハッスルして一緒にあそびました。翌日もやってきましたが、風邪症状は軽減しておらず、3日目になってお母さんから電話があり、受診した結果入院したとの事。もしや私たちが遊ばせすぎたせいかも、そう考えると居てもたってもいられず、すぐお見舞いに伺いました。

サークルベットの中で、点滴チューブに繋がれたまま、それでも元気よく飛び跳ねている様子を見て、少しホッとしたものの、こんな狭い空間で何日か過ごすのかと思うと、可哀そうでなりませんでした。

お母さんの方は、とても恐縮されて、「預かって頂いてとても助かりました。これからもよろしくお願ひします。」とおっしゃいました。このおかあさんとはその後、長い

お付き合いになりました。

このことがあってから、私たちは反省し、外回りをしない日は、専ら子どもの病気の特徴と看護、年齢別の病児の遊ばせ方など資料を集めて整理し、だれが見ても分かるようにマニュアル作りをすることにしました。

これは後に、保育科の学生の授業にずいぶん役に立ちました。

実際どの位の利用者があったかといいますと、4月2名、5月2名、6月8名、7月になって夏風邪がはやり、やっと26名、このまま順調が増えてくれればという期待もむなしく8月には2名という具合で、当然収入は少なく、先の見えない不安と心細さに、あまり人に頼ったことのない私でしたが、「ねえ。年金が貰えるようになるまで私を養ってくれる？」と小川に言いましたら、「いいよ、いいよ。食べるだけなら僕の年金で何とかなるよ。」と意外にも嬉しそうなのでした。

実をいうと退職すると分かった時点で、卒業校の教務から、短大非常勤講師の依頼が入っていました。学生時代の私の成績が決してよかったわけではなく、むしろいい加減だったのですが、養護教諭時代の性教育の授業を見学され、それが面白かったらしいのです。私としては、新しい仕事を始めるので、やってみないことにはどうなるか先が読めない。まず無理ですとお断りしたのですが、「それなら後期からでもいいですから」と熱心に薦めてくれるのです。実際、暇でしたから時間はたっぷりありました。それに少し懐が温かくなると思うとありがたいお話でしたが、大きな問題が一つありました。それは、病児保育は看護師

が常勤していないと成り立たないのです。私が留守の間の、代わりの看護師さんを探さなければなりません。そんなお金はない！ない！どうしたものかと悩みつつ、おもいきって率直に現状を打ち明けて、友人の力を借りようという結論になりました。

すぐ頭に思い浮かんだのは、同じ性教育の学習仲間だった定時制高校の養護の先生でした。この方は、どちらかという、私と考え方が近く、さっぱりしていて合理的。

おそろおそろ話をすると、「いいわよ。仕事は夕方からなので、ボランティアでお留守番に行ってあげる」とあっさり引き受けてくれ、かくして私は、副業を手にする事が出来たのです。

この方は、私たちが少し余裕が出来るようになるまでの3年間、6キロほどの距離を自転車で通い続けてくれました。苦労を分かち合った同志としての気持ちは、交信が少なくなった今もしっかり心に根付いています。

さて、短大に出講するようになってから私の生活も大きく変わりました。新聞、雑誌、講演、関わったケースなど、教材になりそうなものは細かく拾い上げるのが日常になり、電車内の若者の会話や、態度、ファッションなど、自然と観察する自分がいて、それらも教材に組み入れました。若い人との交流は刺激的で面白かったです。保育科の学生への講義は小児保健でしたので、ちょうど私自身の勉強でもありました。そして彼らが立派な保育士さんになって私が保育園に病児をお迎えに行った時、感激の再会なんてこともあり得るなあ。などと思うと、学生が身近に感じられて、愛しいという気持ちが湧いてくるのでした。また、専属の助手さんがついてくれて、教

材の印刷や、実習の設営、視聴覚資料の配備等、すべて指示どおりしてくれるので、本当に恵まれた環境で講義が出来ました。有難いことでした。

これまで多くの方が、同じように病児保育をやってみたいと言って見学にみえましたが、みなさん、どうしていらっしゃるのでしょうか。私は、副業を持たないとやっていけないということを申し上げたいです。

先日10年前に見学にみえた千葉県のかたから連絡が入り、ファミサポ的な運営方法で手広く事業をやっているけれども、保護者の価値観の多様化についていきにくいことや、職員とのトラブル、特に退職の件、お金が回りにくいことなどで行き詰っており、もういちど原点にもどって考えたいので会って話を聞いて欲しいというのです。これには、考え方や理念が違うのでお力にはなれませんかとお断りしました。

これで儲けようと思うこと自体が間違っていると認識すべきなのです。収入が多ければよし、少なくともよし。

私たちは自分らだけで運営しているわけではありません。いろんな人たちの無償の温かい協力のうえに成り立っていることを覚えます。

やりたいことを一生懸命にやる。そしてそれを楽しむ。それが、潰れずに継続できている理由のように思います。